

座談会 － 基盤教育を終えて －

参加者

大河原 開 (リベラルアーツ学群 4年) 竹内 諒 (健康福祉学群 2年)
 筒井 亮太 (リベラルアーツ学群 3年) 中矢 花果 (リベラルアーツ学群 3年)
 山田 諭 (ビジネスマネジメント学群 2年)

〈司会〉紺野 馨・向井 一郎

司会 今日はみなさんが基盤教育の初年次教育を受けた率直な感想、意見などを聞かせてもらいたいと思っています。まず、はじめに、大学に入学してまず「文章表現」「口語表現」で原稿用紙に作文を書かされたり、喋らされたりという必須科目を履修した時の率直な感想が聞いてみたいのですが……。

山田 正直なんでこんなことをやるのかわからなかった。

司会 それが率直な感想ですね。

大河原 僕はなんで？という気持ちはそんなになくて、一年生だから基礎的なことをやるんだらうと思ってて、文章表現というのは実際に手書きをするというのは、なかなか書くチャンスはないので新鮮で、単純に面白いなという感じでした。口語表現のほうも、数十人の前で喋るという機会もあまりないので、これも単純に面白いなという感じがしました。



(奥：竹内君、手前：山田君)

司会 「なんでこんなことをやるんだ」とは思わなかったわけですね。竹内君はどうですか。

竹内 いやー、ほくはめんどくさかったですね。やはり自分は福祉学群に入ってきたので大学一年生の最初から福祉のことをやるのかと漠然と思っていたので。英語はやるっていうのは知っていましたが。文章表現とか口語表現とか、文章をひたすら書かされるとか、人前で発表させられるとか知らないで、なんで

こんなことを毎回毎回やらなきゃいけないのかな、早く福祉の勉強をしたいなあって思いましたね。

司会 分かる気がします。それでは中矢さん。

中矢 私は AO 入試で大学に入ったんですけど、その時の推薦文かなにかに「口語と文章をやりたい」って書いて入学したんですよ。それこそ、さっき竹内さんが言っていたように、珍しくて、ほかの大学ではやっていないし、話したり書いたりするのはもともと好

きだったので、自分の気持ちを書けたり、言えたりすることが大学でもできるんだと思ってそれが魅力で入ったので、逆にそれを早くやりたくて、10科目くらいあるなかで一番楽しみにしていたのは口語とか文章でした。

司会 それは、将来の職業とかもなんとなく考えたりしました？



(中矢さん)

中矢 そうですね。私は声を使った職業がしたいなとずっと思っていたので、今は読み聞かせの勉強だったり、アナウンスメントの勉強だとかをするきっかけにはなったと思います。

司会 筒井君いかがですか。

筒井 僕は指定校推薦で桜美林大学に入学してきました。桜美林大学が僕の第一目標でしたので、そうした文章表現とか口語表現というものが、彼女が言ったよ

うに、他の大学にはないシステムだということもあらかじめ勉強していましたので、ほくのクラスにも正直なところ「やらされる」とか「やらなきゃいけない」ってイメージがあったんですけども、僕は「いやだな」じゃなくて、やってみたいなっていう「ワクワク感」があって、もともと文章を書くのが苦手だったので書くことよりも話すことのほうが好きなので、正直、文章はいやだなと思いました。だから、春学期に文章表現だったら秋学期に口語表現というシステムでやらなきゃならなかったけれども、「よし、口語、来た！」って感じでした。

司会 コンピュータリテラシーは皆さんどうでした？

山田 ぼくはコンピュータは大好きでした。

司会 大好きなものがあってよかったですね。(笑)

山田 いじくり回しているとすぐわかってくるので、先生の説明を聞く前にもう、こここうするんだという感じがあって、だから、それまではネットカフェ程度だったんですが、大学で学んでから、入っているNPO団体で使うようになって、授業は全然無駄じゃないと思いましたね。高校生生活が自分にとって無駄だったと思ってきたので……。口語表現なんかがあって、ちょっと「アアア」という感じだったんですが(笑)、大学に入って実用的なパソコンの授業があったというのが自分にとっては大きな救いでしたね。

司会 いいことばかりはないけれど、悪いことばかりもないなっていう感じかな。大河原君、最初からパソコンはお得意だった？

大河原 いえ、得意じゃなかったんです。だからワードとかエクセルとか何なのかわからなくて。やってるうちにわかってきて、なんかおもしろいなとか、自分ではコンピュータなんかできないと思ってたんですけど、エクセルの授業も取って、自分でもできるん

だな、すごく便利だなと思いました。とってみてよかったなと思います。

司会 課題のレポートの提出などもみな手書きではなくてワードだったりするから、コンピュータできないと非常に辛いみたいだね。

山田 苦手な人もいて2、3人くらいから、「これやってくれたらご飯おごるから」って言われて……。コンピュータ得意でよかった、って思いましたね。

司会 たまたま私は「文章表現」を教えています、時々、「文章表現」の授業を受けるとたちまち文章がうまくなると考える人たちがいます。でも、コースの目標として第一に掲げられているのは「考える習慣をつける」ということなんですよ。もちろん大学でレポートがきちんと書けるようにというような配慮ももちろんしていますが、実用的にサッサッとものが書けますというのが目標じゃないんです。一見すると大学生に作文を書かせるというのはなんだろうという疑問もあるかもしれないけれども、根底にはものを見る力を養うにはどうしたらいいかという問題意識があるんですよ。一方、皆さんのほうで一年、あるいは二年とか経って、あ、あれはこんなことだったんだ、なんて発見か何かありましたか？

竹内 高校と大学の勉強の違いとかを考えてみたときに、高校と大学を比べて大学って、リアクションペーパーとかレポートとか、文章を書く機会がすごく多いですね。そういう時にいい文章が書けるのかといったところを先生に指摘してもらえたりできますね。一学期間だけどやったことによって書くクセがついてきたので、リアクションペーパーとかレポートを書くことがそんなに苦にならなかったですね。それから高校と大学の違いなんですけど、大学ではすぐに先生が発言するようにあててきたり、前に出て発表する機会が高校に比べてすごく多いなと思ったんですけど、その中でも口語表現で前に出て喋る機会が多かったことで、前に出るクセというか、馴れというかがついて、指名されたり前に出てても緊張せずに堂々と喋ることができるようになりました。

司会 人前に出て何かを喋る抵抗感がなくなったということですね。

竹内 一年生の時にそういう風に学ばせてもらうことによって、文章を書くことも、人前に出て喋ることも苦にならないようにさせてもらったのかなと思いますね。

司会 うまく狙いにハマってくれたわけですね。(笑)

竹内 面倒くさいと思ってたんですけど、勝手にハマっちゃいました。

司会 ところで、最初に口語表現などで当てられて喋るといのはどんな気分ですか？

中矢 すごく緊張はしました。最初、大学に入ってきて誰も知らない状況の中で喋っていくのは緊張はするんですけど、そのうち、自分が喋っているときに人が楽しそうにしてくれるのも嬉しくなったりとか……。文章表現の時なんですけど、友だちがハンバーグの話を書いていたんですね、それが、文章からすごくおいしそうなのが伝わってきて、そ

うことがすごく面白くて、それまでは話したり書いたりも人に伝えるということじゃなくて、ただ単に書いたり話したりしているだけというイメージだったんですけど、「伝える」「伝える」ってこんなことなんだとか、ある程度の年齢になってからやったことで感じるようになったんだなあと思いました。

司会 筒井君、いまは口語表現のゼミだそうですが、最初から抵抗なくサッとできましたか？

筒井 僕は高校生のときはすごくシャイで、こんな風に女性が隣にいるなんてこと、考えられなかったくらい、そのことで精一杯だったんです。それなのに、桜美林は7対3の割合で女子が多い。クラスの中でも、まず高校の時にはまずありえないことですが、そういう中で見ず知らずの人に自分をアピールするだとか。そこは抵抗がかなりありましたね。

司会 女の子ばかりのクラスの中で男一人なんて状況はねえ。

筒井 はい、とても辛いです。今ゼミが17人いるんですけど、男子が3名で女子が14名になるので、押されてますが、さっきの話に戻ると、やはり文章表現と口語表現で共通するのはフィードバックかなと思いました。高校では教科書や黒板に書いてあることを写す、要するに決まったことしかやらないのに対して、大学では自分がやったことを評価してくれるリアクションペーパーであったり、口語表現、文章表現だと



(筒井君)

学生同士が深めたり、先生が直接フィードバックしていくことを通じて、自分を評価してくれる場所ができたな、というのが実感です。

司会 文章表現で添削しているとどうも学生諸君はこんなこと書いてはいけないんじゃないかとか、こちらが言ってもいないバリアーを勝手に張って、ここではこんなことを書いてはいけないんじゃないかとか感じているんじゃないかという気がするものがよくあるんですよ。そのあたりどうですか？

竹内 個性を出す文章というよりも、小中高と成績がよくなるような文章というか、先生にうける文章を書こうというクセがすごくついちゃったから、文章表現のときもどうやったら自分の味を出すというよりもどうすれば成績がとれるんだろうということばかり考えて文章を書きましたね。

司会 やはり、1回や2回ではだめで、たくさん書いてもらって初めてそれぞれの個性が出る文章が出てきますね。最年長の大河原君、どうですか。文章表現とか口語とか。1年生からはだいぶ時間が経って他の事もたくさん学びますから基盤の授業の相対的な比重は小さくなりますよね。それを今から振り返ってみてそういった授業を受けたことの意味を考えたりすることがありますか？むしろどういったことが印象に残ってますかという聞き方のほうがいいかな。

大河原 書くことは好きで、印象に残っているのは、新聞記事にある社会問題などを読んでそれについて要約して自分の考えを述べるんですが、要約するためには自分で要点が掴めないと文章を短く要約できないのでここが重要だなということを考えて他の部分を削っていくことでその問題について理解が深まると思って、楽しかったですね。それからそれに自分の考えを足していく、そこで自分の考え深め表現し、それをまた他者に評価される、そういったことが印象に残ってます。特に他の授業と変わるわけではなくて、普通の授業の延長のような気がしますね。



(大河原君)

司会 最初から新聞の要約なんかに興味があったというところからすると、大学の外の社会にも相当興味があったということかな？

大河原 それも多分あるんですが、文章にして自分の考えを文字化することで確かなものになっていくのが面白かったですね。さらにまた評価してもらえると書いたものへの評価というのは自分の評価にも繋がりますよね。コミュニケーションができてくるというか。

司会 基盤の授業というのは高校生の時よりも学生諸君が広い世間と繋がっていくことができれば成功だと思っているんですが、向井先生何かありませんか？

向井 私はサービ斯拉ーニングセンターで参加型学習をやってきて、人のことを的確に把握したりすることがとても大事だと思っています。その第一歩が、実は、ぼんやり考えていることを口にだすことで、文字化していくというのか、そのプロセスで自分がそれまで考えてもいなかった考えが出てきたり、それをボンヤリと言葉にして考えていってそれをキャッチボールしていくなかでもっと自分の考えが深まっていくってことがあって、そのプロセスが今みなさんが言われていることと似てるなあっていう気がしました。大河原君とLAの3年生の二人に聞きたいんですが、基盤教育を受けている中で、特にLAは専門がたくさんあって、どれを学んでもいいですよって、結構たいへんなところにいると思うんですが、基盤教育を受けていくなかで自分のやりたいことがどんな風に見つかったのでしょうか。

大河原 僕の場合、はじめは社会学か国際関係か国際協力みたいなものをイメージしたんですが、1、2年の初めくらいはどれか選ぶじゃなくて幅広くいろいろな分野をやりたいと思ってたんですが、結局は社会学にしようと思ってたんです。ただ、実際に専攻を決めたり、研究テーマをこれにしようと思ったのは授業からじゃなくて、経験から得て考えたことを基にして研究テーマにしたという感じです。でも逆に知識とか情報の意味が小さいということではないんですが、おかげで経験と知識が組み合わさって専攻が出てきた

感じます。

中矢 私は今コミュニケーション専攻で、藤木先生のゼミに入ってスピーチなどをやっているんですけど、でもこの大学に入ってどの学期もスピーチの授業を取ってるんですよ。たまにはやはり、考えるのめんどくさいなあとか、辛いこともあるんですよ。コメントペーパー見るのも、嫌なこと書かれてたらいやだなとかも思うんですけど、でも、この大学に入ってからスピーチをすることで、今回こんなところがうまくいったなあとか、こんなところが伝わらなかったんだなあとか思うようになりました。今ゼミには行ってからもっと深く考えるようになってきました。自分はこうした話題を喋るのは得意だけどこれは苦手とか、今はそこまで考えられるようになってきました。入ってきて、スピーチ楽しいなと思ったから続けてきて、もっともっと自分を知るきっかけになったと思います。

司会 これから先、好きなスピーチを職業的に生かそうと考えることもありますか？

中矢 アナウンサーの仕事に少し興味があってその方面も考えてはいるんですけど、喋ることは続けていきたいなと思っています。意思表示とか自己表現とかは好きだし、そういうことができなくなったりしたら辛いなと思っています。自分の気持ちを抑えて仕事するのはきついなと思って。例えば声に出して、一つの事件や事柄について自分の意見を一つ述べるだけでも自分を表現をする場になるから、そういう場に行きたいと思います。

筒井 僕はもともと留学をしたくて桜美林に入学してきました。専攻を決めようとかいうことを考えるまでも基盤教育はやらなきゃいけない状態ですから、一年間はもう必死で基盤教育でやってきて、二年の春に留学しましたので、二年の秋にもう専攻を決めなきゃいけないという状態だったんです。留学を経験して、異文化体験をすることによって日本人と欧米人にはこういった特徴があって、どっちが良い、悪いではなくて、日本人にはこういった特徴があるけれども欧米人にはこういった特徴があるということを理論的に学んでみたいなと思って、コミュニケーションにしようと思って、現在コミュニケーション学を学んでいます。

司会 目標がすごくはっきりしてるんですね。

筒井 でも、異文化体験もそうなんですけれど、コミュニケーション学と聞くと健康福祉学群やBM学群の方は話すほうと聞くほう、どちらに専門性があると思われるのかなあと考えてるんですが。

竹内 話すほうだと思いますが……。

筒井 僕も話すほうかなあってずっと思い込んでたんですけど、やはり聞くほうも大事ということも、コミュニケーション学を学んでいる身としては思います。やはりいろいろな方向がコミュニケーション学を学んでいると見えてきます。

司会 ところで、山田君、今2年生ですよ。これから大学でどんなことをしたいですか？

山田 今活動している課外活動が大きなものがある、ある意味「おせっかい」みたいなもんなんです。高校生相手に夢を与えるというか、その手伝いをできたらという活動してるんですけど、その活動は続けていきたいと思うし、自分自身いろいろと興味があるんで、その興味を今のうちは抑えないで全部解放してやりたと思っていて、学外でやると次にここにもって帰って、自分の学校でサークルを立ち上げて、最初それがビジネスに繋がればいいんですけど……。例えば料理サークルをやって料理がすごくまくなってお金稼ぐ、単純ですけど。趣味が自分の将来のなりたい像に繋がってればいいと思っているんで。今はアウトドアに興味があるのですが、ただ、今アウトドアをやる時点では利益とかを考えないで、最終的に活動を続けていくなかで一年、二年、三年なかで見つかっていけばいいかなってだから学外趣味プラス自分の仕事をやっていきたいなと思ってます。

司会 学内だけでやるんじゃなくて外へ向かってっていう方向性ですね。

山田 それは、学外活動を通して学校の授業の大切さに気づいたので、学外活動をやっていなかったら口語表現とか意味はわからなかったし……。

司会 確かに家の中にいるだけだったら別に黙ってても構わないしね。竹内君はどうですか？

竹内 そうですねえ。これから何をしていきたいかなあって、ぼんやりと考えたんですけど、これから2年間で、自分が喋る言葉に説得力をつけていきたいなと思うんですよ。説得力というのは自分の中の知識プラス経験かなって思うんです。知識を得て、その知識に応ずる経験をつけることによって説得力というのは増すのかなあって思うんです。それで、大学は知識がつけられる場所だと思うし、福祉というのは専門性が必要な科目かなと思っているんですが、その中で福祉の知識はつけられる、でも大学では経験が得られないから、大学で学んだことを語ったとしても、この子は経験が足りないから説得力がないと一蹴されてしまって、自分が喋ってることを取り合ってもらえないかなって思うんですよ。もちろん大学では福祉に関する知識を身につけていきたいなと思うんですけど、それ以外にいろんな人と関わっていききたいとか、いろいろな施設を見学しに行ったり、講演会などもいろいろ聞いたりして、経験を身につけて、自分のコトバに説得力を身につけていきたいなと、ボンヤリとですが、今考えています。

司会 やはりいろいろなところでコミュニケーション能力が非常に重要になってくるわけですね。今、話を聞いていて、そういう点では文章表現とか口語表現の授業は基本的な方向づけに共通に役に立ってるという気がしますね。そういう意味では文章表現などはやりがいがあるなって思って、ちょっと元気が出てきましたね。それにちょっと嬉しいですね。それから、皆さんがこうした場に進んで出てきて話をしてくれるのも一つの効用かなとも思いますね。いやいやじゃなくてこうして出てきて話をしてくれるのですからね。とこ

ろで、話は変わりますが、基盤でこんなことができたらか、こんなことをやってほしいといった事柄はなにかありませんか？

大河原 授業だったら学生同士が話し合うというのがいいかなと思います。

山田 あ、僕もそれすごくいいと思います。ディスカッションのようなことがしたいです。自分は喋らない、主張しないという人が結構多いと思うんですね。それこそ最初は主題を決めないで。

竹内 文章表現でディスカッションを取り入れるというのも面白くないですか？ 書いて渡して反論してもらって、それに再反論してみたいな形でやってみれば人前で話すことが苦手でも文章さえ書けばできますよね。

司会 実は基盤の科目ではないけれども文章構成法ではディスカッションを取り入れているのですが、誰かが誰かの「意見」に反論してその反論にまた「再反論」をしていくという生産的な過程がなかなか実現しないんですよ。反対の意見があってもすごく控えめに疑問符をつけて訊いてみたりね……。そこをなんとかしようと試行錯誤を繰り返している最中です。

筒井 学生同士のやりとりはなかなかないですよ。発言については一度指名してもなかなか発言しない。けれども、どんどん繰り返して、いわば半強制的に指名していけば抵抗感が減って発言すると思うんですね。そうすれば発言したいのに発言できないとか、質問したいのに質問できないということもなくなると思うんですね。全部の教科でそれができないとしても何かの教科でそれをやれば発言しやすくなるんじゃないかと思いますが。

司会 心強いですね。そういう意見を語ってくれる皆さんのような学生たちがいるというだけで基盤教育をやっている意味があるんじゃないかという気がしてきました。

筒井 僕一つ提案があるんですけど、ゼミでもやっているんですけども「ディベート」を行うということも一つ大事なのかなって……。テーマとしては例えば、なぜ「口語表現」があるかだとか、なぜ「文章表現」があるかということを授業の初めだとか中間だとかに一回行うというのもいいかなって思うんです。

司会 最後には皆さんから積極的な提案もしてもらって、とても心強い気持ちになりました。今日はどうもありがとう。